

令和5年度 学校評価書 (計画段階・実施段階)

特16

福岡県立柳河特別支援学校

自己評価 学校運営計画(4月)
学校運営方針
昨年度の成果と課題
(成果)
(課題)
年度重点目標
具体的目標
信頼される指導・支援の充実
「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実
安全・安心な教育環境の充実

A

学校関係者評価
自己評価は
A: 適切である
B: 概ね適切である
C: やや適切である
D: 不適切である

A

評価項目 具体的目標 具体的方策 評価(3月) 次年度の主な課題
視覚障がい教育部門
幼・小学部
中学部
小学部
肢体不自由教育部門
中学部

項目ごとの評価 学校関係者評価委員会からの意見
A
B
A
A

高等部	自己理解を深め、障がい特性を含めた自分の強みや弱みを適切に伝える力を育てる。	探究活動の導入として、全学級で自己理解を深める学習に取り組み、その成果を掲示する。【1学期内に100%】	B	B	B	自己理解(障がい特性や自分の強みや弱み)について取り組んだ内容を、学部全体に発表する場の設定が必要である。		
	自分の考えや意見を相手に適切に伝える力を育てる。	タブレット端末・スイッチ・カード等、実態に合った多様なコミュニケーション手段を活用する。	B			A	各生徒のコミュニケーション手段(スイッチや手話など)について、年度初めに職員で情報共有する必要がある。	
	集団や社会の形成者としての自覚を促し、主体的に社会参加しようとする態度を育む。	学年集会や類型ごとの合同学習など集団での学習を計画的に実施し、自己の役割を果たす機会を設ける。【学期に2回】	A			A	今年度新たに取り組んだ委員会活動は次年度継続するものの、生徒数の減少に応じて委員会の数を見直したり、活動内容を深めたりする必要がある。	
事務部	一人一人の「できる」を増やすため、教育環境の整備と充実を図る。	教育活動の意義をより認識できるよう、積極的に学校行事等に参加する。	A	A	A	引き続き積極的に学校行事等に参加するなど、より詳しく校内の状況を把握することで、さらなる教育環境の整備と充実を図る。		
	職員及び保護者に対して制度等を説明する際は、分かりやすく丁寧に行うよう努める。	教育活動に必要な備品や消耗品の購入希望調査を行うことで、教育環境の充実を図る	A			A	引き続き様々な手段を用いて情報を提供するとともに丁寧な説明を心がけることで、さらに理解を深めてもらうよう努める。	
		職員に対して、給与や旅費等に係る情報を提供する際は、ポータル等を積極的に活用する。	A			A		
教育支援部	進路課	短期的・長期的な未来の自分の姿を具体的にイメージできる学校体制の充実	ロールモデルとして卒業生等を講師に迎え、進路についての座談会や学習会を実施する。(年に1回)	A	B	A	キャリア教育について、職員の意識を更に高めることができるような方策を検討するとともに、「進路の手引き」の見直しを行い、活用を促す。	
		一人一人に応じた進路の保障	全校幼児児童生徒が将来を意欲できるよう、進路体験や現場実習に関わる場を設定する。	B				
			学級担任や家庭と情報を共有し、実習・進路先の開拓を行う。(年間10回以上)	A			A	引き続き、学級担任や保護者と連携を図りながら実習・進路先の開拓を行うとともに、それらの情報の整理及び共有の方法について検討する必要がある。
支援研修課	早期からの切れ目ない相談支援活動の充実とセンター的機能を担う人材の拡充を図る。	幼児児童生徒の支援や指導に生かすため、外部専門家やコーディネーターと連携し、ケース会議や情報交換会を実施する。(学期1回程度)	B	A	B	外部専門家やコーディネーターと支援研修課の連携が薄かった。支援研修課の扱う業務が幅広く、かつ業務量も多いので、一部の先生に偏らないようにしたり、業務内容を見直しする必要がある。		
	全職員参加の研修の充実と教員間で学び合える環境の構築により専門性の向上に努める。	たんぼほほ通信等、支援や学びの情報を発信する。(月1回程度)	A					
		研修形態(グループ研修、オンライン研修等)を工夫し、教職員が自分にあった研修に参加できるようにする。(年5回)	B			B	研修の呼び掛け方を工夫したり、研修後、内容や様子やチャリンのような形で先生方に還元したりすることで、興味をもって取り組みやすくなる。様々な研修を実施したが、それを「やなとくマイスター制度」と紐づけることができなかった。どのような研修や形態で専門性の維持向上を図るのか、考えていく必要がある。	
教務課	校務支援システム等のスムーズな活用で、諸帳簿の作成や評価等の効率化を図る。	校務支援システムと諸帳簿とのつながりを整理する。	B	B	B	校務支援システムの運用ができる教職員を増やす。(教職員の2割)		
	学校、保護者、療育センター、寄宿舎等の連携を深め、指導の効果を上げる方策を探る。	具体的な方策を探るための関係者会議を開く。(年1回)	B			B	指導を深める方策に関しては、日々先生方に取り組んでいた。教務通信は年1回にとどまっていた。再度方策の見直しをして行く必要がある。	
	学校行事を計画的に運営し、次年度につながる業務の情報共有・連携に努める。	教職員の意識を高めるため、教務通信を発行する。(月1回)	C			B		
企画広報課	学校行事を計画的に運営し、次年度につながる業務の情報共有・連携に努める。	入学式・卒業式などの係同士の情報共有を行い、各係の記録を確実に残す。	A	A	A	入学式・卒業式に関しては、誰がチーフになっても進めることができるように引き続き記録を残していく。総務と各係との連携を図る。		
	保護者同士が集い合う場の設定と情報発信の強化に努める。	ランテタイム懇談会や愛校作業等、保護者が交流を深める場を年2回設定する。	A			A	保護者が集まりやすい場の設定、PRを行う。PTAだよりは引き続き、PTA役員主体でできるように計画する。	
		PTAだより、学校だより、PTA活動に関するHPの内容について見直し、伝わりやすい情報を学期に1回発信する。	A			A		
情報教育推進課	ICT機器を活用し、幼児児童生徒のできることを増やすとともに、教職員のICT活用スキル向上を図る。	ICT機器や周辺機器の活用方法に関する情報共有の機会を設ける。(年間2回以上)	A	A	A	夏季休業に2回、2学期に2回情報の目を設定しICTや機器に関する相談する日を設けた。情報リテラシー能力を高められるようにする。		
		情報化に関する相談室を開設する。(夏季休業中、随時)	A			A		
	本校の教育活動における情報発信の充実を図る。	HPの情報発信計画を行い、各学部等に更新を促す。(各学部学期1回以上更新)	B			B	HPの更新頻度に差があった。時期や学部部門ごとに、必要な時期に必要な情報が、見やすく掲載される必要がある。	
健全育成部	生徒指導課	自他を認め合い、前向きに挑戦する明るく元気な幼児児童生徒の育成に努める。	かがや木プロジェクトを実施し、自分の思いや自他を大切にすることを共有し合う場の設定を行う。(年に2回)	A	A	A	かがや木プロジェクトを通し、幼児児童生徒の「できる!」姿を全体の前で発表することで、幼児児童生徒の意欲向上に繋がった。次年度も継続して行う。	
		豊かな人間関係や安全な学校生活を築くことができる指導体制や環境の充実を図る。	青柳祭や各行事を企画し、幼児児童生徒の「できる!」姿を披露し合う場を設定する。(学期に2回)	A			A	通学バスについて、児童生徒が乗車しないときに通学バスが来校することがあったので、学部だけでなく、保護者とバス添乗員との情報共有にも努める必要がある。
			定期的なアンケートから幼児児童生徒の実態や変化を捉え、SCとの連携に繋げる。	A			B	防災意識向上のための調査はアンケートに答えることで、防災関連の事項について学ぶことができるようになっている。新転任者に対してもよいため継続して行う。
保健防災課	危機管理体制の充実を図る。	職員の防災意識を向上するための意識調査を行い、防災についての理解、周知を促す。	A	A	B	防災に関する事前指導と実践及び反省を一連の流れで実施し、危機管理意識を高めることができた。これらを繰り返し、今後は危機対応に行動できる力を育む方法を模索する必要がある。		
	安全・安心な学校生活及び医ケアの実施に努める。	防災教育の取り組みをホームページを通して紹介する。【学期1回】	B			A		
		各学部の係から、感染症対策、熱中症等、手引を利用した内容の周知徹底を行う。【学期に1回以上】	A			B	シミュレーションの課題の周知に加え、ヒヤリハットを情報共有をした後の活用方法を検討してもよいのではないかと思う。	
寮務課	集団生活の中で自他を認め協力し合い、主体性を育む一員した支援・指導に努める。	緊急時の対応について周知徹底するため、シミュレーション等の課題に対する改善策を協議し全体に周知する。【1学期及び必要時】	B	B	B	寮の行事等を通して、話し合い場を設定する主体性を育む支援の方法を確認することができた。今後においても、主体性を育む方法を模索し、生徒の成長を促したい。		
	寮生活を通して危機管理意識の向上を図る。	寮生会(年19回)や行事(年4回)などを通して、意思の表出や疎通ができるように場面設定を行う。	B			B		
		QOL向上週間(食事・清潔・気遣いなど)を設定する。【月に1回、週間】	B			B		

B	○ 先生方も多くのことを勉強されてあるので、自己肯定感をあげて頑張りたい。
A	○ 進路実現のためには、先を知ることで、知識を持つこと・教員の学びが必要だと思われる。我々が持つ専門性が必要な時は連絡してください。
A	○ 生きていくためには目標が必要だと思う。生徒や保護者に寄り添い、支援していただきたい。
B	○ 「やなとくマイスター制度」は、大変興味深い取組だと思います。教師が変わることでも子どもの成長への大きな力になるはずですので、教職員の意識向上のための研修等の充実を望みます。
B	○ ICTの効果的な活用を今後も目指していただきたい。
A	○ 御校が持つ専門的知識を、「勉強会」等を開きアドバイスをいただきたい。
B	
A	
B	
B	